

EXPE WA NO WA

未来予知
FORESIGHT

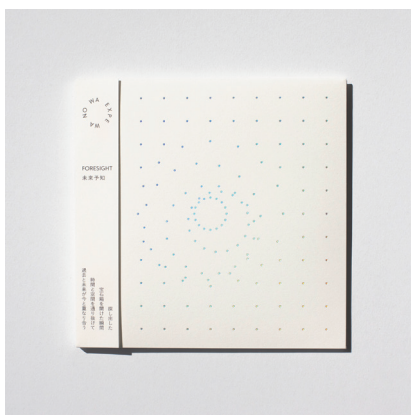
About This Album

奈良県山添村にある障がい者支援施設“大和高原 太陽の家”のメンバー 12 名によって、無作為に打ち鳴らされたハンドクワイアチャイムのピュアなサウンドが空間に広がる環境アンビエント名作“WA NO WA”。同作品のプロデュースを行った山浦氏の依頼によって制作された本作品は、原曲に対するエディットを一切行わず、長尺な時間軸に寄り添って演奏を重ね合わせるスタイルで製作されました。

演奏や表現への意図もなく、ただ純粹無垢に打ち鳴らされたハンドチャイムの音群に対して EXPE 氏が 10 年の時を超えて音を重ねて製作された本作品。「二つの時間軸」をルーツにする音たちが、それぞれの時間軸から解放されて一体となる作品となりました。

後から EXPE 氏によって重ねられた楽器音に対し、“WA NO WA”があたかも EXPE 氏の音が重なることを知っていたかのように、呼応しながら一体となって展開していくようなシンクロシティ現象は、まるで未来予知のようです。10 年後に演奏される、ポリリズムが展開する幾何学模様の間を、ハンドクワイアチャイムの音が時空を超えて自由に飛び回るような感覚。

原曲のピュアリティを大切にしながらも、多層的に音を重ねて制作された本作のミキシングは、全盛期ボアダムスや竹村延和を担当していた林皇志氏が担当。またマスタリングは電子音楽家であり、Astral Space Lab を主催するサウンド・デザイナー / コーダー JEMAPUR 氏が担当。場所を問わず、その場を立体的で没入型の体験空間へと変容させる力を持つ作品へと仕上がった。



1. ETERNA (SEIMEI NO KI) 14:32
2. DWELLA (MEISOU) 12:16
3. DIVINA (TAIDOU) 16:34
4. ESPECTA (JYOUKA) 19:34

アーティスト：EXPE WA NO WA
 タイトル：未来予知 FORESIGHT
 カタログ番号：PRHYTHM-001
 発売日：2023 年 11 月 11 日
 価格：3,000 円 + 300 円 (TAX)
 フォーマット：国内版 4 曲入り CD
 仕様：E 式見開きジャケット / 全面ホログラム
 箔押 / 8P ライナーノーツ封入
 サイズ (mm)：縦 135×横 135×厚さ 5
 JAN：なし
 レーベル：PRHYTHM
 発売 / 販売元：PRHYTHM.ORG

▶ SAMPLE

https://youtu.be/_b8GdVDratg?si=FNMIph8SqxrVvVn

Credits

1. ETERNA (SEIMEI NO KI)
 WA NO WA : Handchime
 Yoshitake EXPE : Space Guitar, Drums, Percussion
2. DWELLA (MEISOU)
 WA NO WA : Handchime
 Yoshitake EXPE : Space Guitar, Bass
 Youhei Yamaura : Percussion
3. DIVINA (TAIDOU)
 WA NO WA : Handchime
 Yoshitake EXPE : Specia Guitar, 12 String Guitar, Tabla Machine, Drums, Shaker, Vocoder
 Manabu Matsumoto : Bansuri
4. ESPECTA (JYOUKA)
 WA NO WA : Handchime
 Yoshitake EXPE : Space Guitar, Bass, Acoustic Guitar,

TR-808, Percussion, Water Drum, Rain Stick
 Manabu Matsumoto : Hocchiku, Syakuhachi, Bansuri
 Youhei Yamaura : Rain Stick, Effect for Handchime

Produce, Compose & Recording by Yoshitake EXPE
 Mixing by Ohji Hayashi & Yoshitake EXPE
 Mastering by Jemapur
 Artwork by Hirokichill

Original WA NO WA Album Produce & This EXPE
 Version Offer by Youhei Yamaura
 WA NO WA perform by C Andou, Y Ootsuki, I Okuda, T Okumura, H Okumoto, M Kitanoi, Y Tokugi, K Nakatani, Y Hayashi, Y Hisada, F Yabuno, K Fujita on 2011 October

Comments

清らかに無垢な透明感あふれるクワイヤーチャイムの響き、奇跡のような音色の重なりは聴くたびに心が洗われる。「大和高原 太陽の家」の WA NO WA の皆さんの演奏を、私は PRHYTHM にて 2 度体験することが出来ました。思い思いに演奏している姿は自由に純粹に心から楽しんでいるようで、そして音色はととても美しく、他の楽器の演奏者さん、イベントに参加していた皆さんとのセッションは本当に感動的だったのです。

そんな素晴らしい体験からの思いも詰まった今回の WA NO WA と EXPE くんとのコラボレーション。チャイムの響きにギターとパーカッションも優しく寄り添うあたたかな安心感と、そして時には壮大な高揚感と共に、光りの未来へと進んで行くマインド・トラベル。特別な時間です。YAMA (NEWTONE RECORDS)

WA NO WA という自然的存在と一体化していく EXPE の音楽に無心で身を委ねていると、音が毛細血管を通じて全身を巡り、振動している感覚が訪れた。

その振動は微細なエネルギーとなり、ふたたび身体から放出されているようでもあった。すべては振動し、揺れ、繋がっている。

そして、あらためて気づかされる。私たちが自然であるということ。

Chee Shimizu

自分もこの微小で壮大な作品と向かい合ったので理解、共感するが、絶対越えられない山なのか海なのか、魅力的なその世界に深く向かい合い、しかもそれを美しく、楽しい作品に転化させたことに感心した。

特に ETERNA はまさにプリズムな音を作ることに成功している。

JUZU a.k.a. MOOCHY (CROSSPOINT)

10 年以上前に奏でられた、意図のないピュアなチャイムの音が、曼荼羅のような多層多元的な音世界と溶け合い、時空を超えシンクロし顕れる奇跡的な瞬間。

その音体験は、今まで味わったことのないものであり、感動的な新鮮さと深い懐かしさとともに、未知の感覚を開いてくれる。

山浦庸平 (WA NO WA 主宰)

探し出した

宝石箱を開けた瞬間

時間と空間を通り抜けて

過去と未来が今と重なり合う

ポリリズムが展開する幾何学模様の間を、ハンドクワイアチャイムの音が 10 年の時空を超えて自由に飛び回る

未来予知

FORESIGHT

「二つの時間軸」をルーツにする音たちが、それぞれの時間軸から解放されて一体となる

作者より

奈良県山添村にある障がい者支援施設“大和高原 太陽の家”のメンバー12名が、無作為に打ち鳴らしたハンドクワイアチャイムのビュアなサウンドが空間に拡がる環境アンビエント作品『WA NO WA』が2023年にCrosspointレーベルからリイシュー発売されて話題となりました。(もともとは2011年に施設が東日本大地震の義援金を目的として自主制作されたCD-Rでした)

施設職員で『WA NO WA』の企画・引率をする山浦備平氏とは20年来の親友で、彼はリイシュー記念として『WA NO WA』のリミックスアルバムを発売し、その内の1曲 (SEIMEI NO KI) がEXPEに依頼されました。

その際のEXPEのコンセプトは、ルーブ編集やエフェクト処理など一般的なリミックス手法を取らず、原曲そのままを使用した、長尺な時間軸に添って演奏を重ね合わせる手法で“ETERNA (トラック1)”を完成させました。

ところが残念なことにリミックスアルバムの計画は流れてしまい、山浦氏が制作途中だった2つのトラックも引き継ぎ、全曲をEXPEの演奏・プロデュースによる同コンセプトのフルアルバム『EXPE - WA NO WA』が再オファーされたのです。

未知で困難なチャレンジが、実験精神を刺激し、EXPEとWA NO WAの時空を越えたロングセッションが実現しました。

実際の制作では予算、曲の長さ、アレンジなど、制約的な難しさはありましたが、WA NO WAのビュアで自由なエネルギーをインスピレーションにして、音の流れに乗って重なり合った結果、『EXPE WA NO WA - 未来予知 FORESIGHT』が生まれたのです。

一見するとEXPEの作品のようにも聴こえますが、あくまで主役はWA NO WAです。

彼らの意図もなく純粋無垢に打ち鳴らされたハンドクワイアチャイムの音が導いて指し示す無限の可能性。まったく作為のないWA NO WAに対して、EXPEが作為を入れ込むことへのためらい。

そんな葛藤を乗り越えながら、黄金比を見定めるような探究は、思ってもいなかった気づきの体験となったのです。

風鈴のように自然にランダムに放たれたチャイムの音色たち。このWA NO WAの音を中心に据えながら、『未来予知 FORESIGHT』を集中して聴くと、EXPEによって重ねられた楽器に対して、WA NO WAが呼応しながら展開していく不思議なシンクロニシティの現象をお解り頂けるかと思えます。

EXPEは録音中にこの現象に着目し、呼応してくるWA NO WAの音に対して、さらにハーモニーを加えるようにして繋げていくという作業を繰り返しました。導かれ進んでいくうちに未知なる展開が立

ち現れてくるという奇跡の発見の連続には驚くばかりでした。

制作中のヘッドフォンの中で超常現象の様な体験をしていくうちに、まるでWA NO WAがEXPEを自動操縦しているような、あるいは、彼らがあらかじめ未来を知っていたかのような錯覚に陥って、ついには偶然の一致という見解も実は思い込みで、通常の意識を超えた世界ではごく普通の自然現象なんだと認識するよう至りました。

このように超自然的に完成した『未来予知 FORESIGHT』は、EXPEの作品ともWA NO WAの作品とも言えない様な、ミステリアスで貴重な共作として仕上がっていると思います。

今作品をどのようにリリースすれば良いかと悩んでいるうち、この機会に長年続けている音楽イベント“PRHYTHM”で自主レーベルを立ち上げることにしました。

いまやオワコンな“CD”かも知れませんが、美しく繊細なホログラムのデザイン、高品質な日本製の“もの”としても、繰り返し聴いていくうちにスルメ的な再発見や追体験ができるような、リファレンス音源ともなるアルバムとして、ぜひとも手に取っていただければ幸いです。

今作品は来年(2024年)にアナログ盤(2枚組)のリリースも計画中です。

今後もPRHYTHM-002(現在クリスタルボウルを中心とした新現代音楽を製作中)以降のユニークな音源をシリーズ化しますので、是非とも引き続き宜しくお願い致します。

Yoshitake EXPE

Artist Profile

Yoshitake EXPE (www.nuexpe.com)

大阪出身の音楽家。Space Guitarと名付けられたファンキーで個性的な演奏法と電子音楽的な音響処理、ポリリズムなど数学的・幾何学的アプローチや先住民部族でのフィールドワークを通じて創造されるエッジで新感覚な作曲とプロデュースを行う。

地道なアンダーグラウンドでの活動ながら、世界中の先鋭音楽愛好家やミュージシャン達に高く評価された。

これまでにValentino Moura, Mono Fontana, Alejandro Franov, Marcos Suzano, Ramm:Ell:Zee, Fernando Kabusacki, Boredoms, EP-4, Varmilon Sands, UA, Aco, Oki, 久保田麻琴, 灰野敬二, 沼澤尚 etc と共演。

またnewtone recordsのYAMAと共に、ポストクラブカルチャーの先にあるDeep Listeningスタイルの実験的で新しいNew Age的音楽コミュニティPRHYTHMを開催している。prhythm.org

2001年nutronとしてアルバムリリース
2003年Music Magazine誌年間ベストアルバムに選出され、初の海外公演
N.Y. Hip Hop オールドスクールの伝説RAMM:ELLZEEのアルバムレコーディングとライブに参加

2004年Fuji Rock Festivalに出演
2008年山本精一とのユニットPARAでFuji Rock Festivalに出演

2009年ブラジリアンパンデイロ奏者マルコス スザーノに招聘され世界中から現代パーカッション奏者が集う南米最大級のフェスPERCPANで共演

2013年南米ツアーにてMono Fontanaと共演、アルゼンチン国営放送でSF映画“Metropolis”に即興演奏

2017年コペンハーゲンジャズフェスティバル出演

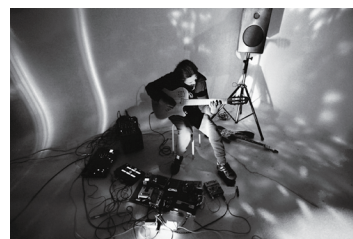
2018年アルゼンチンブエノスアイレスの名ホールCCKで公演

2019年ECMジャズミュージシャンからのオファーで、イタリアプレシアの世界遺産オペラハウスで公演

ドイツベルリンではテクノ系アーティストValentino Mouraとの共作Astrometric EffectをIDOからリリース

2020年Yoshitake EXPE Youtubeチャンネル開設、現在200本以上のライブ作品を展開中

2023年障がい者施設の環境音楽グループWA NO WAのアルバムを再構成した作品をプロデュースリリース。



WA NO WA

奈良県山添村にある障がい者支援施設『大和高原 太陽の家』の利用者による、単音打楽器“クワイアチャーイム”の即興演奏ユニット。

2011年3月11日に発生した東日本大震災をきっかけに、震災で亡くなられた方々への追悼と、多くの問題を抱える世界の為に何か発信できないかという思いのもとアンビエント作品を自主制作し、2022年Crosspointレーベルからリイシューされ話題となった。



About PRHYTHM

PRHYTHM (prhythm.org)

現象にフォーカスする、多面的音楽レーベル。

Yoshitake EXPEとYAMA (NEWTONE RECORDS)をレジデントに据え、テーマとコンセプトが毎回変化する、実験的サウンドセレモニーPRHYTHMを2008年より全国の聖地やアートパーク、教会などの環境で計40回以上にわたり開催。

過去の出演者は内海イズル、EYE、アレハンドロ・フラノフ、灰野敬二、フェルナンド・カブサッキ、濱瀬元彦、アキツユコ、山本精一、PARA、GOFISH、YTAMO、Marina Fages、ARTMAN、Shhhhh、セルヒオ・ヴェルディネリ、和泉希洋志、沢田稷治、JEMAPUR、マルコス・スザーノ、沼澤尚、渡辺亮、WA NO WA、他。

2023年よりインディペンデントレーベルとしての活動も開始し、第一弾として「EXPE WA NO WA 未来予知 FORESIGHT」を同年月にリリース。

Other Comments

The EXPE/ WA NO WA album called “FORESIGHT” (PRHYTHM-001) is a fantastic journey into some musical universe that is located halfway between High Class New Age and Spiritual Jazz.

Of course those genre labels don't do justice to a music that is well beyond that.

I love the very soothing sound but this is not boring New Age, it is very happening, under a curtain of seemingly "relaxing" music.

EXPE brings in his polyrhythm science, sense of harmony, and this alone puts it closer to "In A Silent Way" by Miles Davis, than some easily made ambient.

Track #2, my favorite, is the best example of this, with subtle chord work, mesmerizing guitar harmonics, and a very clever 9/8 rhythm (that could be felt as 3+3+3 of 4+5) that smoothly morphs into some straight and very groovy 3/4 rhythm to go back to the first pattern.

This is very sophisticated music for sure.

The bells provide a nice and warm cocoon to EXPE's personality, which is the dominant force of this album.

Polyrhythms are one of the highlights of this album, predominantly under the 3,6,9 numbers, with the exception of track #3 which has a fantastic 14 beats (7+7) tabla rhythm melody, then ending in a very cute five beats tabla pattern.

Actually, track #3 is the exception, as it puts the bells work more upfront, with a simple 12 strings guitar sparking the syncopated momentum for the bells to flow like honey.

The "bells" are actually a "Choir Chime", by twelve players striking one single handchime, in random order.

Those twelve players are from the Yamato Kogen Taiyo-no-ie, a support facility for the disabled in Yamazoe Village, Nara Prefecture.

What a nice idea and project !

Not to forget the velvety and curvy bansuri flute by Manabu Matsumoto, adding another heartwarming and sensual dimension to this track.

FORESIGHT is a very pleasant and meaningful album that could find a place in anybody's heart, and not only ambient aficionados.

Music is universal, and it sure is EXPE and PRHYTHM's religion !

フランス Paul Mahoux

EXPE/ WA NO WA のアルバム『FORESIGHT』(PRHYTHM-001) は、ハイクラス・ニューエイジとスピリチュアル・ジャズの間にも位置する素晴らしい宇宙音楽への旅だ。

もちろんそんなジャンルでレッテル付けする事は、それを遥かに超えた音楽性を正当に評価するものではない。

私は『FORESIGHT』の心地良いサウンドが大好きだが、今作はいわゆる退屈な「ニューエイジ音楽」とは一線を画していて、一見「リラックス音楽」のように聴こえるペールの下では、非常に物凄いことが起きている。

各楽曲には EXPE 独特のポリリズムサイエンスとハーモニー感覚が持ち込まれており、この点だけでも安易に作られたアンビエントではなく、マイルス・デイヴィスの『In A Silent Way』に近いと言える。

私のお気に入りのトラック #2 はその最たる例で、繊細なコードワーク、魅惑的なギターハーモニクス、そして滑らかに変容する非常に巧妙な 9/8 のリズム (4+5 とも 3+3+3 のようにも感じられる) が特徴的だ。ストレートでとてもグルーヴ感ある 3/4 リズムへ移行し、最後はもとのパターンに戻る。これは非常に洗練された音楽だと断言する。ペルの音は EXPE の個性を暖かく包み込みな

がら、このアルバムの主軸で主力となっている。様々なポリリズムはこのアルバムの聴きどころのひとつで、おもに 3,6,9 の数を基に構成されているが、トラック #3 は例外で、14 拍子 (7+7) の素晴らしいタブラ・リズムのメロディがあり、後半はとてもキュートな 5 拍子のタブラ・パターンで終わる。

実際、トラック #3 はペルの音がより全面に押し出されており、シンプルな 12 弦ギターがシンコーペーション・リズムの勢いを増し、ペルの音が蜜のように流れ漂っている。

「ペル」の正体は、奈良県山添村にある障がい者支援施設「大和高原太陽の家」の利用者 12 名が演奏する「クワイアチャイム」の音で、それぞれの奏者が 1 つづつハンドチャイムを持ちランダムな順序で鳴らしている。なんて素敵なアイデアとプロジェクトだろう！

忘れてならないのが、松本学氏によるピロードのような曲線美のバンスリーフルートで、トラック #3 に心温まる官能的な次元をさらに加えている。

『FORESIGHT』は、アンビエント愛好家だけでなく、どんな人の心にも響く、とても心地良く、意義深いアルバムだ。音楽は万国共通であり、EXPE と PRHYTHM の宗教であることは間違いない！

沖縄 Paul Mahoux

まじザケットがとても素敵で感激しました。

聴くごとにハッキリとバズルが整っていくような感覚がとても気持ちよく、太陽を浴びているような星を見ているような、宇宙のデザインや時空の伸縮を感じました。

聴き終えるとキラキラで深く不思議な気持ちになりました。この世からあの世の美しさが詰まった宝箱のような作品でした。

自然や宇宙のような深い癒しを与えてもらえる音楽体験でした。

『FORESIGHT』を繰り返し聴いているうちに、意識の深層にあるプログラムのようなものが、良い方向に書き換えられていくような感じがしています。

コンピュータを再起動してサクサク動くようになるような感覚です。

CD という近年では珍しい媒体故、購入を迷っている方も多いと思いますが、是非共有したい音楽体験なのでオススメです。

北海道 YJR

WA NO WA の純粋なハンドチャイムの音色は神聖な空間に包まれているようだ。

それは演奏を一緒にした時に、太鼓を叩く肩にトンボがとまっている姿を見て、ああこういう事なんだよと無我の境地の音を目の当たりにして納得したのです。

地無し尺八で禅の音を学ぶ者としては、竹林を吹き抜ける風が鳴らす音を理想の境地として、せせらぎの音に生き物達の鳴き声に心から惹かれています。

そんな自然の美しさのような WA NO WA の音に、法竹 (地無し尺八) や横笛を重ねることが出来てとても嬉しく思っています。

この法竹は数百年古民家で燻された煤竹で作った笛です。

自然に近づく道具として、竹の節を抜き指穴を開けただけのシンプルな作りのため、修行や祈りの道具として使われ、一般的に合奏には不向きと言われています。

ですが、このプリミティブな音色にこそ、現代に必要な静寂や癒しが宿っていると信じ、その味わいをそのままに新しい音楽に生かす事を一つの夢としてきました。

正にその夢を叶えてくれたのが、この EXPE 氏の魔法でした。チャイムや竹笛の音に寄り添い、最大限に魅力を生かすように重ねられた音たちは、宇宙の神秘に旅するような世界を生み出していま

す。

自分の言葉では EXPE 氏の凄さはとうてい語れませんが、未来を予知したような、この世に流れる見えない世界を降ろしたかのような音はもはや普遍的な美しさを持っています。この作品に参加させていただけた事に心から感謝します。

全ての存在の幸せに繋がりますように。

ありがとうございます。

兵庫 松本学 竹笛奏者

聴く環境によって様々な光景を見せてくれる、何処に連れて行かれそうでも何処にも行かない、かつ DJ 的にもプレイ出来てしまう。そんなアルバムは中々ないと思います。Yoshitake さんのビューな音への拘りがギューギューに詰まったこのアルバムは、『EMERALDA』に続き、これからもずっと聴き続けるだろう私的愛聴盤になりました。ありがとう、Yoshitake さん。愛知 DJ GO aka Slowmotion

本作品はオリジナルを探索する人や、何か新しい事をクリエイトをする人に推薦したいです。

その理由は、そもそもが EXPE さんの音楽が独自性の塊りだという事。そこに WA NO WA のビューなハンドペルの音色。1 つのハンドペルが鳴り響くだけなのに際立つ納得の独自性ある美しい音の響き。

この有限な世の中で、2 つの出発点の違う独自性がかけ合わさって形になっているのが

『未来予知 FORESIGHT』ライナーノーツの EXPE さんが書き下ろした楽曲作成ストーリーを読むと、まるでこのアルバムが作られることが決まっている中で、EXPE さんと WA NO WA を指揮する山浦さんと、その他関わった人達の人生が積み上がって来たように思えます。

スタート地点は違うけれど、この作品でクロスオーバーし「時間は未来から流れて来る」と言う小難しい物理学の話が音楽として体感できるアルバムのように思いました。

この音楽に包まれる間、意識は浮遊し、自由な想像空間へ入り、まるで用意されたかのような自分とシンクロし、その感覚を“いま”に落とし込み、それを糧として今日を歩む。そんな使い方をしています。

大分 TY

色んな意味でめちゃハイクオリティだと思います。オーディオ的にも内容的にも、音響的に立体的に構築されている事は分かるのですが、僕の再生環境ではまだ全貌が見えない印象で、今後オーディオ機器をアップグレードした状態で聴くのが楽しみです。一般家庭のオーディオで聴いてもなかなかその奥行きが伝わらずに、表面的な理解で終わるのでは無いか？というのが懸念ですが、個人的にはリアレンスにずっと使えそうで、聴き込み続けたいと思います。

表面的な印象でヒーリング音楽っぽいと受け止められてそこで終わると、その奥までいけない感じがするからこそ心配ですよね。

どの曲も共通するものはありながらテキストが違っで完成されていて、飽きずに楽しめる構成も良かったです。ありがとうございます！

熊本 EGG

自分にとって音楽を聴く行為とは、どういう意味があるのか考えることがある。

そこには「未知のものへの関心」があって、そういう、「こころが開かれた状態」にあることが健全であるというか、気持ちがいいというか、とにかくワクワクしてられるのだ。絵を見たり、本を読んだり、お茶のいい匂いを嗅いだり、新鮮な野菜を食べたり、好きな

人の体に触れたり、そういうことと同じことなんだと思う。

EXPE の音楽はいつも新鮮でみずみずしい。きれいな水、反射する光。

そう、この『未来予知 FORESIGHT』のなかで、WA NO WA のチャイムと EXPE のギターは互いに光を反射しあっている。

小川哲 イラストレーター

池の水面を眺めていると、水中から泡が出てきて波紋が広がる。あちらからこちらから波紋が広がる。水面は降り注ぐ陽光を反射して煌く。波紋にゆらめき、時間ごとに変化して煌く。波紋が WA NO WA で、光の煌きか EXPE。そんな関係性を想像しながらデザインしました。

Hirokichill デザイナー

『未来予知 FORESIGHT』を傾聴すると、認識していた「わたし」や「自然」の境界を超え、制限や不完全さに囚われない、現実世界の枠を越えた光の空間へと辿り着く。空を見上げるとキラキラとした幾何学イメージが重なり合っていた。それは記憶の奥底を辿っているような、夢の中にあるような、初めての音楽体験でした。

大阪 TS

透き通る音と耳障りのよい旋律とビート。リラックスできます。心の鎮静効果を感じます。

神奈川 HS

旋回そして拡散していくホログラム このまげゆい宝石箱には きっとあなたの宝石も入っています SIMPO 映像

『未来予知 FORESIGHT』は、疾走感、ワクワクする感じから始まって、途中で色々な旅をしていろんなことを思いながら、また前を向いたりして、ふと気がつくと終わりが近づいてきているみたいな、セレモニーのような、セッションのような体験のできるアルバム。EXPE の演奏に調子を合わせるようにチャイムの音が聴こえてくるような聴こえ方は不思議ですよね。

制作の上での実際は逆なんでしょうけど、狙ってのことなのでしょうけど、その合わされ具合がなんとも巧妙。

EXPE の世界観から織りなす研ぎ澄まされた音の連続は時としてソリッドになり過ぎるのであろうけど、いい塩梅で WA NO WA のチャイムの音がシンクロしてきて、ゆるさ・暖かさ・ほっこり感が加わる。

一見繰り返して反復しているような連続性のある音は、予定調和ではないが故に捉えどころがなく、入ってくる音が毎回違うことで、毎回発見があるので、何回もリピートできる・したくなる、飽きのこないアルバムであり、そのストーリー性はまるで1つの物語のようだ。

聴き終えた時には自分の物語が先に進んでいる感覚になるので、音楽体験で確実に精神世界にコネクトすることを実感！！

自然療法医 ST

ヘビロテでずーっと聴いています。

ハンドチャイムの不定形な音の連なりにスペースギターの宙を舞うような音が絡み、アンビエントな環境音楽かと思いきや、ギターとパーカッションが複合的なリズムを刻みはじめると、次第にエスニックな世界へも連れて行ってくれます。なんだか心地いいのです。人間が根源的に持っているものであろう波動や鼓動を呼び覚まされるのでしょうか。

全面ホログラム箔で小さなドットをあしらったジャケットデザインも音楽を見事に表現していて好感度爆上がり。老眼には厳しけれど極小の文字でびっしり書かれたブックレット付き。「うーん、どこにも手抜きがないな」と呟いてしまいました。本屋のBGMとしても秀逸です。
長野 スワロー亭 奥田亮

奥田亮

音だけ聴くと、まさかWA NO WA とEXPEさんが別録りしたとは思えない楽曲たち。どんな奇跡が起こってこんなことになったのか！？細やかに聴き取っていくと、絶妙に重ね、散りばめられた構成。もはや神業か！？音環境も大切ですが、自分の内部環境にも大きく左右される作品だと実感します。聴いていると自然と目が閉じますが、まさに目を使わずに視るような世界観。自分の内側に入ってシアターで観るような、没入型で聴くのがいちばん良くて、毎回感性によって落とし込みが違うのではないかと聴き終えると旅をしてきたような充足感と臨場感があり、一種のエネルギー交換がある。

岡山 MDR

奥田亮

包み込まれてやばいアルバムです！いちばんに感じたのは実りと広がり。音はもちろん、風景や思想が広がって突っっていく気分になりました。気持ちいい！今の私にとっても突き刺さり、このままでいいんだと思える心地よい響きでした。純粹って美しいな。純粹さの奏でる音の輪が美しく、身近な神秘の美を感じました。EXPEさんの文章も最高です。東京 MI

奥田亮

早速モニタースピーカーで聴かせていただきました。聴いている間、ずっと音の光に乗って色んなところに連れて行ってもらいました。よしたけさんとWA NO WAの交わりが光として此処に存在して、空間全体が包まれて言葉で説明し切れない素晴らしい体験でした！音もほんと心地良くて。。大切に沢山聴かせてもらいます。リリースおめでとございます。

Jesus Weekend

奥田亮

やわらかく水の波紋のように広がる音。瞑想的だけれども、深いところに入りすぎず、心地よい風やこの世界の温かみを感じる作品でした。それがとても心地よく、心の世界と現実世界の間の軽くまどろんだような感覚でいたい時にぜひ聴いてください。

TIKO

奥田亮

風にそよぐ大木の葉
太陽に照らされたクリスタル
WA NO WAのハンドチャイムに呼応するように、時にEXPEの演奏に追隨するように見事にシンクロする両者の煌めく音の世界は優しく誠実で力強い
混沌の世にあっても、未来は明るいのだと信じさせてくれる純粹無垢な光の粒に包まれていく
未来の心配や過去の後悔など不要 さあ今を懸命に生きよう
『未来予知 FORESIGHT』は私にそう語りかけてくれた
岡山 Keywon

奥田亮

どこまでも続いているかのような桃源郷からの音の便り
人間=自然　の中に在る普遍的な煌めきが全

方位に光を放っているかのようで
緻密でありながら流動的
静と動の穏やかで刺激的な Meditation dance
がこの身に湧き上がっていく
未来予知 FORESIGHT
偶然の必然的出会いが産んだ
美しい音の曼陀羅作品
和歌山 GAMA

奥田亮

岩手の長い冬が終わり、植物は芽を出しはじめる。
山から溶け出した雪が下界を潤し、気がつけば暖かい空気に共に草花が世界を彩る。
田んぼに水が張り、ほんの数日の間だけ空を映す大きな鏡になる。
カエルの合唱、雨音、気持ちのいい風、蝉の鳴き声、秋虫たちのオーケストラ。
その一音一音に命が宿っていて、重なって重なってリズムになる。
ふと、愛だな…と思った。
その時カーステレオから流れていたのは『未来予知 FORESIGHT』でした。
岩手 H.O

奥田亮

螺旋階段をクルクルくるくると駆け下りたり駆け上ったり、ときに自分自身もまわりながら降りていくような心地よさと踊りの感覚が重なる。
光が螺旋の中央へと差し込むときの輝き、煌めき、繊細な揺れ。
子どもの頃に永遠だと思い遊びに夢中だった時間や情景がぼつぼつと浮かんでくる。
掬おうとすると拾える確かな音があって、それは耳ではなく目の奥で拾っていくような音。
聴くことに身を委ねて、身体の強張りがだんだん弛むと同時にその目の奥で捉える音も鮮明さを増していく。
螺旋階段のようだったものが空間と自分との間にチャイムの響きが残り、そこにギターも重なり、空や宇宙の光からの通信のようにメッセージをやり取りしている気持ちになりました。
綺麗な海の波の揺れを手のひらですくいあげ、落とし、波紋を生む遊びをふと思いつく。
全体的に穏やかな海の波を感じると思ったら、畑の朝露ほど細やかな粒まで自由自在に姿を変える水のような音を観せてくれました。
熊本 MOCA

再生ボタンを押した瞬間から始まる洗練された世界
瞑想的音楽、ヒーリングやヘルツ音を聴いているかのような感覚でもあり音楽であるところがまた興味深く面白い
いつの間にかに聴き入っている没入的世界観
音の一粒ずつが感覚に冴え渡る
なぜこんなにも心地が良いのだろうかと考えてもなかなか感覚を言葉にするのが難しい
次から次へと降ってくる音に違和感はなくすんなりと自分の感覚に寄り添う音
目の奥、松果体へ響き渡る音たち
「聴く」行為から音を「感じる」感覚へ没入感がよりこの世界観を魅了してくれる
優しいギターの音色、温かみのある打楽器の音、心地良く澄み渡る音色たち
聴けば聴くほど素敵な世界観へ誘われる
1曲が終わるタイミングで「音源（音楽）を聴いていた」感覚に戻る
次の楽曲が始まるとまた違った世界観へと誘われる
一貫して感じるのは自分の身体や脳、心への音の響き、ダイレクトさ
攻撃性のないおとなしやかな世界に魅了される
奏者の意図を己の解釈で受け取れるような音た
答えはなく自己解釈を愉しめる哲学的アート

のような開放的かつ複合的な音楽
この空の空間に音という色が混ざり合う
ホワイトカオス（白い混沌）と言えば良いのか言葉が見当たらないが嫌味の無い屈託の無い音たちの混ざり合う感覚を味わい堪能した
<感じるキーワード>
森、川、祭典、水、光、音、広がり、共振、ハーモニー、モダン、創造性、振動、芸術性、楽観的、洗練
熊本 KRT

奥田亮

なんて希望に満ちた音をしているんだろう。しあわせが胸に広がってくる不思議な感覚で始まって終わっていた。希望というのは何か？社会に対するとか人生に対する叶えたい要求要望の類ではない。本来の魂が、只々喜びの中に生まれ、この世界を体験して日輪の光明の中にいるような、そんなあたたかな希望の光である。田舎暮らしを始めた家の障子を開け放つと、虫の音や蝉の声、風が木々を揺する音が『未来予知 FORESIGHT』のリズムと重なり、とても心地良い。新たなレイヤーがごく自然に発生し、どれがリードなのか後か先か境目はなくなり私の鼓動も内から外へ広がって何かの内側となったり外側となったり、重なってゆく。3曲目、血潮に残された懐かしさがよぎり、後半は、いつか肉体を離れた時にはこんな音楽に包まれるのではないだろうかというイメージの軽やかで力強いリズムに浸る。4曲目、終いまで辿り着いたとき、また最初の小さな一粒に戻る。（延々聴けるね）何度か聴き終えてからライナーノーツを開く。4曲それぞれに添えられたタイトルの響きと意味、曲作りのエピソードとEXPEの言葉が何かの答え合わせのように響き、共感と新たな感動を味わった。
大分 AK

奥田亮

2011年の震災をきっかけに、障がいがり施設 太陽の家のメンバーと制作した作品WA NO WA。当初からメンバー達の純粹無垢な音の響きに、なにか人間的なものを越えた温かさ、懐かしさ、慈しみのようなものを感じていた。私は昔からEXPE氏の音の中に同質のものを感じていて、そのセンスや世界観をリスペクトしており、直感的にWA NO WAのリミックスをお願いした。EXPE氏の制作に対する向き合い方は、とことん真摯で繊細であり、何よりチャイムの音とメンバーへの愛を感じた。

完成した本作品は、期待を遥かに上回るものとなり、心底感動している。10年以上前に奏でられた、意図のないビュアなチャイムの音が、曼荼羅のような多層多元的な音世界と溶け合い、時空を超えシンクロし顕れる奇跡的な瞬間。メンバーの音が新たな生命を得て喜びの中で歌っている。その音体験は、今まで味わったことのないものであり、感動的な新鮮さと深い懐かしさ、温かさ、慈しみとともに、未知の感覚を開いてくれる。
今やオリジナルのメンバー12名のうち、そのほとんどが他界されている。山の中の施設で、誰に知られることもなく、たんたんと生きてこられた方々が奏でる一音一音が、また新たに生まれ変わってたくさんの人達へと届き、広がっていく。それは、私とメンバーにとってこの上ない幸せであり、旅立たれた方々も喜び祝福してくれていると感じている。この作品を産み出してくれたEXPE氏、制作に関わってくれた方々に心から感謝をおくりたい。
山浦庸平 WA NO WA 主宰

森羅万象
あちらとこちらとの繋がりを通り世界
細胞にじわじわと染み込んでくるような音の連続
何回もリピートしたくなる中毒性
鳥取 CI

奥田亮

2011年に録音を担当した作品が約10年の時を経てリマスタリングでCD・アナログ化。そしてREMIX盤に続きEXPE氏によるREWORKへと広がるとは、当時とても想像もつかなかった。それはまるでこのタイトル『未来予知』のように、あたかもその時点ですでに未来（この現実）が同時にクリエイションされていたのかも知れない。それほどにこの12名の自由で純粹で調和に満ちた演奏が時間軸を超えて宇宙に響き渡っていると言う証拠だ。丸々オリジナルの音源と並行するEXPE氏の音像は、その両方が相互作用し、クワイアチャイムの音が水の零一滴一滴のように、水面に落ちて広がる波紋のようにも感じ、時には夜空に広がる満天の星や流れ星となり、地球や宇宙の響きとなって身体と共鳴する。森羅万象、生きとし生けるものすべての生命の音楽がここに表現されているように思う。この混沌とした時代にこそ必要な音が、確かにここにある。

MIROKU WA NO WA 原作 録音担当
まずは、とても素敵なパッケージで、丁寧に大事に作られたものということが伝わってきて、それだけでとても幸せな気持ちになっていました。そして、CDをかけると、頭は無意識のうちにいつもライブで見ていたよしたけさんの演奏の音を想像していたようで、でも実際演奏がはじまると、自分の想像とは違う音色に、わあと惹き込まれていきました。よしたけさんのライブでは暗闇の中で出会う光や風や見えないなにかの存在に驚いたり魅せられたりしているのですが、この作品では、陽の光の中で見える景色というか、見守られているような、とても温かい気持ちになって、聴いています。曲ごとの解説も、聴きながら、エピソードやアプローチの仕方など読みながら想像して…と楽しかったです。プリズムレーベル第1弾ということで、今後も楽しみですし、またライブへも行ける機会をねらっています！また演奏が見れる日を楽しみにしています。アキツユコ 音楽家

どこか架空の国で太古の昔から未来に向かって途切れず鳴り続けている音楽の最新の部分を切り取った、というような印象を受けました。要所要所で出てくるリズムがカッコいい。“ESPECTA”のリズムはAphex Twinみたいですね。
西滝太 (PARA 鍵盤奏者)

奥田亮

ライナーノーツ

未来予知

2011年、東日本大震災の被災地域へ義援金を送る目的で、奈良県山添村にある障がい者支援施設“大和高原 太陽の家、のメンバー12名によって鳴らされたハンドクワイアチャイムの音を収録したアルバム“WA NO WA”が自主制作された。

施設職員であり企画者の友人から依頼を受け、2023年、EXPEがこの録音物“WA NO WA”に対し、後から楽器を重ね挿れていく手法（マルチトラックレコーディングのオーバーダビング）で本作品“FORESIGHT”を制作した。そのため原作“WA NO WA”の音は編集されずそのまま使用している。

おそらく原曲の録音データのサンプリングレートは44.1k /16bitで、収録に使用した録音機器もコンシューマー（一般向け）モデルと思われる。この録音 データを後からアップサンプリング等処理をしても、EXPEによって重ねられた録音データ（96k/32bit float）が比較的鮮明な印象となり、相対的に“WA NO WA”の音は少し霞んで滲んだように奥まってしまう。

この問題の処置として、ハンドチャイムの音を擬似的にサラウンド効果を与え、周りを取り囲んで漂うような空間処理を施した。そのため“WA NO WA”の音は幻影のように淡く、幽玄の彼方から柔らかな光が降り注いでくるようなアンビエンス効果を得ている。

ハンドチャイムの夢見心地さによって、一見すると（一聴すると）主体だったはずの“WA NO WA”のサウンドはどンドン潜在的に沈み込んで脇役へと移って行き、逆に鮮やかさのあるEXPEのサウンドが主役として浮き上がってくる。そうなること、もってEXPEワールドへ突入したくなって、細かいカラフルなギターの音を散りばめたくなる。が同時に、“WA NO WA”の淡い光を留めるよう、自ずとバランスも抑制させられた。

並行しながらも混ざり合う2つの世界には、厳正な境界線が確実に存在し、陰陽太極図や黄金比のファイφを想起させるような精密を持った絶対法則があるかのようだった。

非常に興味深いことに、EXPEがオーバーダビング録音をしていると、ヘッドホンの中の“WA NO WA”がハンドチャイムでEXPEの演奏に呼応しているような錯覚に陥った。その“WA NO WA”の音に対して、さらにEXPEがハーモニーを繋げて紡いでいくことで、その先の未知だった曲が流れはじめ、有機的な展開として立ち現れてくる。

このシンクロニシティ現象を常に着目していると、まるでオートマティックに“WA NO WA”がEXPEを操縦しているような、もしくは、あらかじめ未来を知っているかのような、不思議な超常現象を体験していくうち、偶然の一致という見解も実は思い込みであり、通常の意識を超えた世界ではごくごく自然現象なのかもしれない。

かくして超自然的に創出した“FORESIGHT”は、EXPEの作品とも“WA NO WA”の作品とも言えない、ミステリアスで貴重な共作として仕上がった。

しかしあくまで主役は“WA NO WA”である。是非とも、空間に散らばって消えゆくハンドチャイムの音たちが、主導して音楽を生み出しているという視点を持ったまま、目の前に浮か出てくる、立体的な幾何学のレイヤー構造にも意識を向けて聴いてもらいたい。万華鏡のように色々な角度で新たな発見が生まれ、音響による曼陀羅を体験するために、出来れば解像度の高いサウンドシステムやヘッドフォンで体験してみて欲しい。

1. ETERNA (SEIMEI NO KI)

「永遠」「不変」「永久」「不滅」「無限」など永遠性の意味を含んだタイトル。原曲タイトル“生命の木、が成長し続けている様をイメージして名付いた。

もともとリミックスアルバムの企画段階で、オープニング曲として依頼され、2022年に制作された。

ギターはもちろん、ドラムやパーカッション、鳴り物類もすべてEXPEの演奏によって自宅録音された。

バSTDラムは南米のフォルクローレによく使われるボンポ・レゲーロという牛革の太鼓を床に横たわせ、キックペダルを繋いで足を踏んで演奏。

本物の皮のため、天候や時間帯でチューニングがすぐに変わり、響きや音程にモロに影響が出る。

遅長くレコーディング本番中に、窓から太陽光が降り注いできて、良い感じに曲の音程感とピッタリと合った。

ボンポ・レゲーロに使われている胴の木は非常に軽いので、本番中に演奏がエキサイトするとどンドン前へ進んでいってしまった。同時に、設置しているマイクからも遠ざかっていくので、音がゆっくりフェードアウトしていく効果もそのまま収録されている。

中盤以降のパートでは、音量が下がる事態を避けたかったので、何度も途中で演奏を中断しながら、すぐさま太鼓を手前に引き戻しながら演奏を続ける事となった。一旦ストップし問題解決をしてから録音をやり直すことも出来たはずなのに、直観的に最後まで突き進んでいた。

プレイバックを聞いてみると、このアクセントによって絶妙なタイミングでドラムブレイク（小休止）や、効果的な音量変化が自然に作られていた。またこの時だけ直射日光を浴びた事によって、皮のコンディションが著しく良好でチューニングが気持ち良く合っている。まさに天の采配としか言いようがない。

何度かテイクを録り直そうかと考えていたが、不完全ではあるが、このワンテイク1発録りをそのまま残す事が必然に思えた。

奇跡は石ころのように、どこにでも転がっている。

2. DWELLA (MEISOU)

「暮らす」「宿る」「居住者」など存在性を意味する造語的なタイトル。原曲タイトル“瞑想、を起点として、地球とその大地に根づいていくイメージと、地球の鼓動や躍動感をテーマとして作成。

このトラックは“WA NO WA”主催者であり本作の依頼者でもある山浦氏によってハンドチャイムに残響エフェクト処理がなされ、さらに彼が演奏した沢山のパーカッション類と鳴り物系が重ねられた未完成の録音ファイルを引き継いだ形の制作となった。

事前に入っていたリズムトラックに対して、EXPEが少しのアレンジと整理をした後、エレクトリックベースを中心にギターの演奏を重ねて完成させた。そのためシンプルに繰り返される太鼓の演奏と、中盤からはじまる所謂4つ打ち（正確には3つ打ちだが）などは、山浦氏の構成にそった展開となっている。

この曲の制作中だったある日のこと。たくさんの太鼓が同形パターンでミニマルに繰り返されたながらも、人間的な揺れ感のある演奏だったので、よりどっしりとした安定感を持たせるためにはどうしてもベースが必要だ、と悩んでいた。

実はその時、EXPEはベースを所有しておらず、実姉のYAMAHA BBベースを勝手に借りパチ愛用したのが、遂に取り戻されていたのだ。ギターにオクターバーなどのエフェクターを繋ぐことで、ベース音域まで出せるのだが、弦の響きやナチュラルさが失われる。

そんな矢先、スタッフ仲間がベースをはじめたいと言うので、楽器屋へ付き添う事になった。タイムリー過ぎたので、付き添いだったEXPEは試奏した勢いでベースを2本も購入してしまっていた。

そして仲間の分と合わせて合計3種類のベースを取り換えながら、このトラックへ録音して曲が形成されていった。

EXPEにとって、はじめてギターを弾いた瞬間から今に至るまで、ギターで出せる最も美しいサウンドはハーモニクス音だ。今作でも“WA NO WA”のハンドチャイムと同化するかのように多用しているが、そこにエレクトリックベースでオクターブ下のハーモニクス音も重ね合わせることで生まれる倍音オーケストラの煌めきは極上の効果だ。

気づいた方も多だろうが、中盤はジャコパスへのオマージュ。もちろんフェンダージャズベ（フレットありだが）。

後半の3つ打ちパートは、EXPEらしかめストレートと直球な展開へと導かれたが、ここでは5弦ズスティンパーガーベースのハーモニクスでのパーカッシブ奏法。

リズム展開を促すフィルインが必要だったので、ミキシングエンジニアの林氏によって、古いROLANDスペースエコーを使って、太鼓の音をダブミックスしてサブリミナル的に加えたり、最終的な仕上げとして、3つ打ちキックをEXPEが叩きなおしている。

3. DIVINA (TAIDOU)

「神聖」「予言」「神々しさ」など神秘性を含蓄する造語的なタイトル。原曲タイトルの“胎動、から想起し発展する生命の尊さや輝くような美しさをイメージして創作した。

このトラックはなんと言っても12弦ギターによって溢れるばかりの輝きと、そして広がりのある雄大な風景が想起されるような壮大な物語だ。もともとから、オリジナル“WA NO WA”の曲順と本作“FORESIGHT”の曲順は正反対になる予定だったため、今作のアルバムを1つの映画として見立て架空のストーリーをイメージしていると、第3話にあたるこのトラックはとても重要なパートとして、どうしても12弦ギターの響きが必要だと直観してしまった。

取り敢えずデモヴァージョンとして、普段からメトロノーム代わりに愛用しているヴィンテージのモンドでビザールな80年代のインド製初期電子タブラマシーンで変則ビートを鳴らしながら、以前に友人から譲り受けたアコースティックの12弦ギターを取り出して、“WA NO WA”に重ね合わせていくと直観したイメージ通りのランドスケープが浮かび上がってきた。プラボー！と思いきや。しかし、ここで新たな問題が発生。

と言うのも、通常のアコースティックギターでは物理的にどうしても押さえきれないハイポジションがあり、スムーズに演奏するのはいくら練習しても不可能なことに気づく。ギターの高音域側に切れ込みがある形状=カッターウェイのモデルのギターならば簡単に実現する。と言うわけで、視えたヴィジョンを取りやめて妥協する訳にもいかず、どうしても希望のデザインを有する12弦ギターを入手しなければいけない事態となってしまった。

近年ではテクノロジーが進化し、デジタルエフェクターやギターシンセサイザーによるモデリング技術によって12弦ギターサウンドを模擬することが可能となっている。そんな

機材をEXPEも所有しているのも、もちろん当初は色々と試行錯誤を試みだが、この制作においては不自然さが見え透いてしまってフィットしない。

そんな訳で、可愛らしいレトロなタブラマシーンによって繰り返される7や10など変則ビートのチープな電子音に、ワイドレンジにステレオで拡がった12弦ギターのストロークがシンクロしたり裏返ったりしながらも、天上界ではまるでキースジャレットかチックコリアが奏でるフェンダーローズのように、“WA NO WA”のハンドチャイムが時折絶妙に危ういテンションコードを打ち鳴らしてくる。そんな世界観の中、さらにダメ押しのように、旧知の仲で仙人級の竹笛を吹く友人マナブ君によるバンスリの音色が漂ってくる。心地良い風に吹かれながら上昇気流に乗って、どこまでも飛んで新天地へと逝くかのようだ。

取り敢えず録音された12弦ギターのデモテイクは少し粗い部分も残っているが、雰囲気が変わってしまうので録りなおしせずそのまま採用している。近年では編集によって修正したり、ループ再生で繰り返される制作も多いが、本作や“Emeralda”等ではあえて冒頭から最後まで全て弾き通すことで起こるダイナミクス、ヒートの持つ不完全さや及びつさ、醜い内にある美や深さなども感じられるのではないか、とも思う。

本来の希望では、前半パートには女性ウィスパーボイスのハミングを収録したかったが、残念ながらタイミングとチャンスが合わなかった。仕方ないので久しぶりにTALKERを引っ張り出して、ギターと声でボコーダーを収録したが、肉声ではないので気付けないうちに薄っすらしか使えなかった。

仕上げに、エンジニア林氏の所有するとても薄いシンバルを借り、12弦ギターとハンドチャイムの金属同士にある音の隙間に対して、金属のブラシスティックで小さく叩くと、輝きの彩りとコントラストが深まった。冒頭と最後には“WA NO WA”のメンバー達がいる奈良県山添村にある不思議巨石スポット“鍋倉溪、の石の川のサウンドがうっすら聴こえてくる。

4. ESPECTA (JYOUKA)

「期待」「予感」「直観」「占う」などポジティブな希望を含んだ、未来を予見するような意味を込めた造語。原曲タイトル“浄化、を押し進める自然治癒力や宇宙のエネルギーなどの源の不思議さや、自身への浄化の必要性とその目的などについて改めて考えてみたり、今作を創るにあたって常に感じていたことをテーマとしタイトルに当てている。

人生は長いようで短く儚いのかもかもしれない。

そして、激動するような不可避な事態も起こり得るのかもかもしれない。

そんなことも延々と薄々と考えてみることもあった。ちっぽけで無力な自分ではあるけども、愚かだとしても、何かしないではいけないのも人間のさかなのかなと思う。

関係ないような事を書いてしまったが、音楽=音の波のエネルギーの源流は一体どうなっているのか？

その不思議さ。そして音によって影響される効果効能の経験。

音によって救われたり癒されたり気付かされたりする有り難さ。

音の波のエネルギーを出す時のコンディションや心境、その目的についてまで考えが及んでいく。

つまりは浄化は自分にとって、我々にとって必要不可欠で絶対的に最重要なことだ。

本作の最終話となる4トラック目は約20分という超長尺な難曲だった。このアルバムを一連の物語として見立てると、どんなエンディングへと帰結するのか？ という謎は、制作当事者のEXPEにとっても未知の領域だった。

その先には不安もあれば、期待や希望もあって、結局出来る事と言えば前向きな姿勢で直観に従いながら、勇気をもってじっくりと突き進む事しかない。

この曲は、もともとのオリジナルトラックに、“WA NO WA”主催者であり本作の依頼者でもある山浦氏によってハンドチャイムにデジタルピッチシフターと残響のエフェクト処理がされているものを引き継いで制作した。

さしあたってはメトロノーム代わりに、旧友でありテクノ系のDJでもあるENITOKWAから借りっぱなしだった貴重なヴィンテージのアナログリズムマシンROLAND TR-808（ちなみにEXPEのROLAND TB-303と取り替え中）を13拍子のパターンで打ち込んで流し込んだ。

癖のある合わせにくいビートに合わせて「和」や「雅」など日本庭園を想起するようなサウンドを使ってパーカッション、エレクトリックドラム、さらにはタライに湧き水を入れてウォータードラムとして演奏したものを重ねてライブ録音していく。ある程度ベーシックなリズムセクションが出揃った頃、“WA NO WA”のハンドチャイムが鳴り響いて向かう先にあるハーモニーに沿ってギターやベースを追加していった。

この時点では、おそろしく長い曲の全貌がまったくと言って良い程、霧もやのペールに包まれた状態で、自分がやっていることが正しいのかどうかさえ分からない。

ただ、1つはっきりしていたのは、この世はすべて幾何学で成り立っている、ということだ。

音と音の隙間にあるスペース（無）を拡張させながら、目を使わずに視ることによって、隠されていたかのようなプリズム色の細いラインが幻視のように浮かび上がってくるタイミングがある。そのヴィジョンを捉えた瞬間、何も思考をせずに、ただただお筆書きのような按配で楽器の示すとおりに音を出すしかない。

勿論そう簡単にいくものでもなく、まったく瞑想と同じように、結局成功の秘訣は普段からの地道な鍛錬とディープラーニングが肝要で、その面においては自身の弱さ甘さに絶望したくなる時もあったりもするもんだ。

ゆっくりだが次第に、パズルのピースが埋まっていくように、友人マナブ君による法竹（ほっちく）と呼ばれる尺八よりも大きくてプリミティブな竹の木管楽器を収録することで、雪舟の水墨画のような風景が現れた。

808の無機質なビートと雪舟庭との、新鮮なミスマッチさを進展させるように、分厚いフェンダーベースの白玉コード進行や、ヴィヴィッドで民族的なタムタムを連打するドラミング、友人仲間と一緒に挿入したハンドクラップ、控えめだけど重要な入魂のクラッシュシンバル、ライドの刻み、呪術的なガラガラ、清涼感あるレインスティック、サブウーファーを揺らすエレクトリックドラムの重低音など、次々と演奏して録音していく。迷ったり試行錯誤する必要がなくなり、どこにどう配置すれば良いかがハッキリと視える。

制作の大詰め途中でツアーに出ることになった。この最後の曲に出来れば鉄弦で6弦のアコースティックギターのナチュラルな音を、エッセンスのように少しだけでも入れてみたい、と願っていた。

愛知県豊橋で、とにかくギターや機材に詳しい楽器愛好家の方が偶然にも聴きに来て下さり、アコギの話をしていると、その方は急に原付に乗って会場を出て行った。

しばらくして、立派なハードケースを抱えて戻ってきて、手渡された。

中には、宝宝箱を開けたような、これまで自分が弾いてきたギターはすべてオモチャだったのか？！と感じてしまった程、とてつもなく美しく輝く鮮明なサウンドを奏でるアコギが入っていた。

こうして、このアルバムを締めくくる鍵でもあった最後のピースが見事にハマリ、ずっと未知だった終盤からエンディングまでの終着点が導かれるようにして描きだされた。

我ながら他人事のように観察していても、この音の世界は不思議な驚きの連続であり、同時に、ごく自然で当たり前の現象のような静かな感覚も同居している。

ようやく長い旅が終わり、帰り着いたような安堵感を味わっていると、

ふと、真実は矛盾、という言葉にも満たないような感覚が再び頭によぎってきた。

エピローグ

作為や意図も無くビュアに鳴らされた“WA NO WA”のチャイムの音は、人による演奏と言うよりは、音階のある風鈴が風に吹かれ、心地良いサウンドを奏でる自然現象による環境音に近いのかも知れない。

多かれ少なかれ、音楽家やミュージシャンによる演奏や作品には、その人の信念や経験、人生哲学に基づいており、知識と技術が使われたり、メッセージや感情が入っていたり、活動行為にも理由や目的がどうしてもなく在るだろう。人間の性。

“WA NO WA”はこの対極に位置しているように思える。

我々と正反対だとすると、どう足掻いても辿り着けない境地から、エゴやこだわりもなく、純粋な無意識さで、意味もなく無目的な行為を通じて、柔軟で自由に、時には無責任に、真実に迫るようなコミュニケーションの交信をしているのでは無いか？ と想像してみた。

人は愚かにも、何かに意味を持たせようとしたり、自分の見たいように解釈をしたり、一方的な勘違いをしている場合も多い。

真実は永遠に謎のままではあるが、今こうして“FORESIGHT”を聴けることを、とても幸せに思う。感謝。

Yoshitake EXPE